



序

本書は、羊土社の編集氏と「研究費がギリギリで、何とか研究の質を落とさずに実験コストを下げられるかをいろいろ試しています」と雑談したことがきっかけで企画されました。このような工夫はたいていの研究室の主宰者は考えているでしょうが、それが表立って紹介されることはこれまで見かけなかったように思います。そのような「知恵」を広く紹介して、研究費をより有効に使うことができれば少しは日本の科学にも貢献できるかな、というのも動機の1つです。



実際、本書で紹介する内容の多くは知り合いの研究室から教えてもらったものであったり、多くの共著者の先生方からとっておきの「知恵」をご執筆いただいたもので、私が“その道（節約術開発）の専門家”というわけでは決してありません。生化学・分子生物学的手法を使ってよい研究をしたいと思っている、一般的なウェット系の研究室の主宰者です。

自分で言うのもなんですが、本書の内容で私たちは（多分、研究の質を落とすことなく）相当なコストダウンができていますので、本書で紹介する内容をお試しになっても決して損はないと思います。まずは気楽に目を通していただき、ご自身の研究室の事情に適合しそうなところから参考にしていただけましたら幸いです。表題の「エコ」は金銭的な節約の観点が主ですが、時間・労力・効率・エコロジーの観点も多分に含んでいるつもりです。

1つだけ強調しておきたいのは、いくらエコといってもケチが高じるあまり研究に実害が出ては本末転倒だということです。この点だけは踏み外さないように工夫するとともに、研究が萎縮しないように注意を払うことは言うまでもありません。ストレスを感じさせない、ということもポイントでしょう。ですから、各節約方法のメリットを強調するばかりでなく、デメリットがある場合はそのこともフェアに書くようにしました。



ついでに学生さんや若い研究者向けにひとこと言っておくと、「こいつになら研究費をつぎ込んでいい！」とボスに思わせるようなふだんの研究ぶりを見せることです。日頃からよく勉強して、よく考えて、情熱をもって、注意深く実験しているか、ボスは見えていないようで意外とそういうところは把握しているものですよ。必要なときには思い切ってお金を使うことも研究には重要なことです。そのためのふだんの節約です。皆さん、がんばってください！

2016年6月
村田茂穂